

『深い学びを紡ぎだす—教科と子どもの視点から—』
グループ・ディダクティカ編 勁草書房 2019年

立命館宇治中学校・高等学校 藤川 瞭
(2018年度修了)

昨今、「アクティブ・ラーニング」という言葉が教育界でブームになっている。確かに、これからの知識基盤社会においては「どれだけの知識を覚えているか」ということよりも「その知識をどう活用するか」・「他者と協働しながら新しいもの生み出す」といったことが重要視され、教育現場ではその能力を育むことが求められている。こういった時代背景もあり、書店にはアクティブ・ラーニング関連の書籍が数多く並んでいる。中には多くの実践やグループワークの手法が紹介され、すぐに授業に活かせるものも多い。

私もそのような本を手に取り参考にしつつも、常にどこかで「グループワークをさせればアクティブ・ラーニングなのか」「一問一答形式のテストをやめれば深い学びになるのか」「今までの講義形式では深い学びは無理なのか」といったような疑問が付きまどっていた。本書では、「アクティブ・ラーニング」と、それに代わる表現である文部科学省の「主体的・対話的で深い学び」の導入背景やその意味を指導要領の文言などから再考し、これからの「深い学び」のモデルケースを提示している。本書によると、アクティブ・ラーニングという言葉で学習の形態重視に陥ってしまうという危惧から内容知識の重要性も加味した「深い学び」が後から差し込まれたと述べられている。

本書は教育理論書の側面を持ちつつも実践書でもある。2章以降では教科の実践や学校マネジメント実践から「深い学び」を考えるものになっており、理論と実践の融合・往還が図られている。(社会・国語・道徳・総合・体育・めあてづくり等)どのテーマについて読み進めても新たな気づきがあり、これからの実践において参考になる。

形式主義に陥りがちなアクティブ・ラーニングや、学習指導要領の改訂に伴い上から降りてきた「主体的・対話的で深い学び」を各教員がしっかりと咀嚼し、実践に活かすことがこれから重要である。その実践のヒントを本書の著者たちから学

ぶことができた。

その中の一つを紹介する。村井氏による「アクティブ・ラーニングの自己目的化に異議あり！」の章である。本章ではアクティブ・ラーニングの対義語として「ワンマンショーの授業」を提示している。この「ワンマンショーの授業」ができる実力をつけてからアクティブ・ラーニングに取り組むことが必要であると述べる。村井氏は子どもたちをワクワクさせ、アクティブな学習者にするのに必要なキーワードに「意外性」と「ストーリー性」を挙げている。これを意識して授業を組み立てることで学習者の「へーっ」・「なるほど」が促され、良い授業となると述べる。それを講義形式のワンマンショーの授業で伝えるか、その材料を持っている状態で子どもたちのアクティブ・ラーニングを見守るかを考えるべきなのである。このどちらにせよ子どもたちの脳内ではアクティブで深い学びになっていることだろう。よく陥りがちな教科書にある、教師が望む解答を探し出すような活動を「アクティブ・ラーニング」とすることに警鐘を鳴らしているのである。

「アクティブ・ラーニング」と言われればグループワークの手法や発表のやり方などが紹介されることも多い。そういった方法を取り入れるのももちろん重要なことだが「主体的・対話的で深い学び」を意識しなければならない。学びの方法に拘るだけではなく、教科の目的・意味や学び・学問に対する面白さを実感させ、自ら学び続けるようなきっかけを創ることが真の「アクティブ・ラーニング」なのではないか。「主体的・対話的で深い学び」に「深い学び」が加わった意味を理解し、形だけではない「アクティブ・ラーニング」の授業を組み立てていかなければならない。

